

## おわりに

---

**上田**：今回は海域学の研究助成を得ておりまして、こちらから海というものと接点をつなぎながら、これまでも研究ということとつながりという形で話をさせていただいたわけですが、全体的話を聞いて何か発言、あるいは3人の先生方に共通するようなトピックで何か発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

**聴講者 A**：青柳先生もおっしゃられました南洋という言葉に含まれる、日本人の持っているイメージについてお伺いします。東南アジア、太平洋も含む概念として日本人は南洋という言葉を使ったのですが、そうすると南洋は、いわゆる東洋ではなく、アジアでないこととなります。そのときに、南アジアのほうは果たして東洋なのかどうか。小西先生がお話しされましたけど、南洋とアジアというものの違いは、どういうふうなものとして考えたらよろしいでしょうか。

**青柳**：南洋という言葉自体は非常に漠然としていて、南進論の中にはときにオーストラリア、ニュージーランドまで含めて南洋で、ここまで行かなきゃいけないと言っている人もいます。ただ、南洋群島という言葉を使い出すと、これはもう明らかに委任統治をしている、ミクロネシアのこの地域だけを指しています。

特に、後期になってきますと、日本の戦略という意味で、ここの部分を内南洋と言うようになります。そして、それからもっと南に関しては外南洋という言葉を使いまして、内南洋だけにとどまっているわけではなく、外南洋までも進出しなければ日本の生きてく道はないというような議論になっていきます。その場合の外南洋はこちらまで含めて言っていると思います。ただ、どこからどこまでを外南洋というような定義は多分ないと思います。

**小西**：もう一つ気を付けなければいけないのは、「南海」という言葉です。特にインドとくっ付けて言う場合には、「印度南海」という両方合わせて言ったりすることもあります。その場合のインドはもちろん漢字の「印度」ですが、非常にそれも漠然とした言い方で、ちょうど中国の中原からさらに西方を「西域」と呼ぶように非常に漠然とした言い方と同じです。このような「南海」という言葉は、研究書としても、昭和18年ぐらいにどんどん出てくる本のほとんどが「印度南海」という言葉を使っています。

それから、むしろインドをあらわす古い言葉は「天竺」ですよね。天竺と南海をくっ付けて使うことはありませんが、南アジアとかインドという言葉はむしろ、ずっと後になって出てくると思います。

**青柳**：既にお亡くなりになっていますが、矢野先生って京都大学の方がいろいろ南進に関する資料を抜粋して集めておられまして、そこでは南洋、南進、島だけではなくて、オーストラリア、ニュージーランドあたりまで話をしている人たちが結構おります。

**聴講者 B**：小西先生の「印度南海」というのは、どういう文脈でそういう発言が出てくるのですか。

小西：印度と南海を2つくっ付けて言うようになっていったのは、恐らく大東亜共栄圏との関係もあるのではないのでしょうか。大東亜共栄圏と言うためにはインドまで含んで、自分たちはこれを解放するのだ、そして、アジアの盟主になるのだ、というようなイデオロギーが背後にあるのではないかなという気がします。したがって、インパール作戦なんていうのは、まさにインド世界へ侵攻していく重要な入り口だったのではないのでしょうか。

聴講者 C：私はラテンアメリカをやっているものですから、きょうのお話聞いていて、いろんなところでつながりがあって面白いと思うことがいくつかありました。例えば青柳先生の日本が夢見た南洋というところなのですが、これはちょうど1920年代の後半、昭和の初めから30年代の頭くらいまで、盛んにブラジル、アマゾンに身を振り出していました。そのとき新聞などで、移殖民学校の校長などが教育をしてブラジルに送り出すときには、青柳先生がお話しされた井上雅二の南進論のような言説が延々と並ぶのです。そういう意味でいうと、明治からずっと日本人のこの時期の心象っていうのでしょうか、そういったものがあまり変わってないなっていうのを思いました。

それと同時に、ブラジルに移民した人を再移住させるという、南洋再移住論が盛んにブラジルの中で起きてきているのです。ブラジル自身は日本と敵対するわけですがけれども、そういう中で南洋にもう一度我々が戻って、我々が熱帯農業の指導をするリーダーになるのだというようなことを言う奴がいっぱい出てくるのです。これは帰るお金もないので実現はしなかったのですが、この南洋再移住論は一時期すごく出されたのです。そういう意味では、日本が夢見たのですが、きっと日本から出た移民たちも当時夢見たところだったっていうので、何かつながりがあるなって思いました。

それから梅原先生のお話の中で、スペインとポルトガルがフィリピンの領有をめぐるいろいろなやり合ったトルデシヤス条約の話が出ていたのですが、あれはブラジルをちょうど通っています。今のブラジルの領土を見ると、実際には内陸までものすごく大きく入り込んでいます。それはひとつにはポルトガルが一時スペインに併合されてなくなってしまったという事実をうまく使い、ポルトガルがどんどん中に入っていったからと言われていています。そうすると、フィリピンの領有をめぐる時もポルトガルとスペインはお互いやり合ったと思う。一時期ポルトガルがスペインに併合され、事実上表に出てこなくなるときにはどうなっていたのか。もし何かあったらと思って聞いていたのですが。

梅原：ポルトガルとスペインの対峙というのは非常に微妙なもので、王家は互いに娘を嫁に出したり、婿を取ったりしているので王室はつながっています。ですから、ポルトガル人とスペイン人っていうのはもろに攻撃して相手を倒すというようなことは非常に心が痛んでできかねる。しかも、お互いに当時のカソリック王国です。キリスト教徒が異教徒ではなくキリスト教徒を倒すというのはあってはならないことです。「やるぞ、やるぞ」と言いますが、その実行には何か理屈が必要です。下手をするとやった方が批判の対象になってしまいます。非常に微妙な関係です。最終的には、フェリペ2世治世の最後の段階でポルトガルを併合してしまいます。その結果、モルッカ諸島のチドール島もテルナテ島もスペインの影響下に入ります。しかし、その後はモルッカの価値がだんだん減ってきました。だから、両国がモルッカ諸島を巡って争っていたのは1520代から70年代までの40~50年間だけです。

**聴講者 D:** 17 世紀に入ると、オランダが進出してきてモルッカを押さえる。完全に制海権を握る。それで個別にポルトガルに拠点を叩いていく。17 世紀に入ると、また様子が変わりますね。

**梅原:** 17 世紀にはオランダとイギリスのアジア進出が強大になり、逆にスペインは衰退に向かっています。

**青柳:** ミクロネシアもスペインが最初来るのですが、ほとんどカトリックのお坊さんしか来なくて、あまり関心を持たなかった。マリアナでは衝突があったのですが、パラオでは政治的・軍事的問題は起きていません。

**上田:** ほかにいかがでしょうか。

**聴講者 E:** 梅原先生にお聞きします。フィリピンにはたくさん島があるので、小さな船による近距離の移動は昔からあったと思うのですが、長距離の船が入れる港を作ろうとすると地理的な条件が加わってくる。そうすると、長距離用の大きい船が入れる港がその後発展するようになるなど、フィリピンの街の発展に関して影響は何かあったのでしょうか。

**梅原:** いろいろ調べてみますと、フィリピン群島の大きな町、港市というのは、マニラとは違う別のところにありました。一つはミンダナオ島東部のブトゥアンです。ここはかつてチャンパーと深い通称関係を持っていました。11 世紀初めには中国に朝貢していました。また、そのころ南部ルソンとミンドロ島辺りにマイという大きな国があって、その重要港がミンドロ島北岸、今のプエルトガレラ辺りにあった、と考えられます。それから、もう一つはスールー諸島のホロです。

マニラの北にはトンドというところがあり、ここもまた 10 世紀ごろの碑文にその名前が見られます。しかし、当時ブトゥアンのほうにシュリビジャヤから派遣された重要な人物がいて、トンドにいたのはその一段格下の人物であったという話があります。どうもブトゥアンがトンドよりも交易上一枚上であったようです。中国船はこの時期（11・12 世紀）からブトゥアンに出入りしています。ブトゥアンのすぐ東側には山脈がありますが、そこに金鉱が幾つもあり、川下から砂金が取れます。昔から金の産地でした。そういった事情を考えますと、15・16 世紀はセブあるいはマニラがだんだんと重要になってくる時期でしょうが、それ以前は群島の重要港市の配置が違ったのではないかなと思います。

いずれにしても、船が大型化して港の地理的条件がそぐわなくなり、港の位置が動くというのは、その通りだと思います。ただし多くが河口港ですから、大河の場合長い年月で土砂の堆積が進み、港の盛衰に影響が出てくるケースは認められます。

**聴講者 D:** マニラがマニラになるのはいつごろなのでしょう。一応中心になっていくのは。

**梅原:** スペインがやってきてから。と考えていいと思います。先程も言いましたように、スペイン到来時にマニラはブルネイ王国の交易前哨基地として栄えていました。

**聴講者 E**：それは総督とか置くわけですか。

**梅原**：そうです。

**聴講者 D**：ガレオン貿易でアカプルコとマニラを結ぶ定期航路が作られるわけですね。

**小西**：大きな港を作れるという話に関連して。ボンベイは今は名前を変えてしまいましたが、ボン・バイアというポルトガル語は、本来よい港という意味から来た名だそうです。それがムンバイーになったのは、全然語源が違うのです。音は似ていますけれど、その辺り一帯に住むコーリーという先住民が祭っていた女神がムンバ・デービーという女神。そのムンバ・デービーの町という意味でムンバイーという名に変えたわけです。ですから、ボン・バイアとは語源から全然違う。ダルエッサラムもそうですね。平安の港という意味です。

**上田**：きょうのお話は大変インパクトのある話でした。マゼラン隊が貿易風で偶然フィリピンに、何かダーツを投げるような感じでぼんぼんぼんと刺さって、どこに最初に刺さるかによって、その後の歴史の展開が微妙に違ってくるということですね。そういった意味で言うと、前近代の場合、風と船の形状と風向きの変化というようなものがどういうふうに歴史の具体的な状況に影響を与えていくのか。港の形成なども含めていろいろ考えられるのかなと思いました。

それでは、本当に3先生方、どうもありがとうございました。